

---

# 私ヲ壊シテ～呪いのメール

怖気忘郷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私ヲ壊しテゝ呪いのメール

### 【Nコード】

N0300K

### 【作者名】

怖気忘郷

### 【あらすじ】

沢木あいが死んだ理由を桜芽雲雀が語る話。

秋野有紀子を送る呪いのメール。

太刀打ちが出来なかった沢木あいは当然死ぬ。

対応に困るクラスメイト達や雲雀……………。

祝成功蘇生術に続く、ホラー系物語。

## プロローグ（前書き）

呪いのメールがゴメンナサイのあれに似てますね  
↑  
でもパクリのつもりはありません。

この物語だけでも面白いですが、

「祝成功蘇生術」を先に読んだ方がもっと楽しめると思います。

## ブローグ

呪呪霊呪呪死  
死死死死死呪  
幽幽幽怨幽死

私を壊してください  
貴方は楽になるでしょう  
私を壊せば皆は喜び  
それが許せないから

1 9 8 2 7 5 8  
9 3 8 7 4 9 2  
0 1 9 7 4 8 3

「……なあにこれ」  
「知らないよ」

少女達は話す。  
当時話題になっていた呪いのメール。  
PCや携帯にしか送られない……

では、次のことを話そうか。  
次は、何故あいが死んだか、だ。  
引き続き進行役は私、桜芽雲雀。  
沢木あいと秋野有紀子が送る話……

——私ヲ壊シテゝ呪いのメール——

## 惨劇の始まり

「……あい」

「……誰か呼んだ？」

「ハアッ！？呼んでるのは私よ、わ・た・し。」

そばにいたのは私と空玖友妓。

友妓は早速話し出した。

「あい、呪いのメールって知ってる？」

いきなりすぎるだろ。

「いや、いきなりすぎるから。」

「いーじゃんよ。何か文句でもある？雲雀。」

あるとは一言も言っていない。  
ただ突っ込んだだけだろ。

「で、呪いのメールだけど。」

「うん。」

「話すから。準備しててね。」

呪いのメールってのは……

まず、意味不明な言葉が書かれたメールが来るの。  
それを見ると死んじゃうっていうこと。

「簡単でしょ？」

「ほへ？聞いてなかった……」

「だから、そのメールを見ると死ぬの。」

何故友妓はそんなことが言えるのか……

## 秋野有紀子へのいじめ

あの時私はチラッと秋野さんの方へ向いた。  
秋野さんは黙って座っている。

陰で幽霊だの骸骨だの酷い言われよう。  
にも関わらず彼女は全く気にしていない様子。

「秋野さんって暗いよね……話しかけづらいや。」

友妓は私が秋野さんの方を向いていることに気づいたらしい。  
後ろから肩をポン！と叩かれた。

「よっ、雲雀。」

クラスのリーダーの以東さんだった。  
因みにこんな言い方だけど、  
以東さんは以東真紀と言って、女の人だった。

「友妓もこっち来い。話がある。あいも来た方が良くもな。」

私たちを連れて、以東さんは私たちに話した。

「秋野を虐めるんだ。」

友妓は驚いたように以東さんの方を見た。

「……秋野さんを？」

「そうだ、秋野をだ。」

「でも動じなさそうじゃない？」

「案外そうでもないさ。奴、呪いとかかけるらしいぜ。」

それってやばいんじゃないか……？

「どう返すのかな…… 本当に大丈夫なの？ 以東さん……」

「平気だろ。奴は簡単にいけるさ。」

私にとっては長期戦的なものかと思うが……。

## 以東真紀の拷問

「アイツには休ませない……雲雀なら出来るだろう？」

「出来ないことはないけどさあ……」

「じゃあ決まりな。先公に言って来い。」

以東さんの命令は絶対だった。

仕方なく私は直接先生に話して、

秋野さんには休ませないことにした。

本当にこんなこととして良いのだろうか……

「有紀子」

「……何か用かしら」

「お前は今すぐグラウンド１０週して来い。」

以東さんやる気だ……

秋野さんは立ち上がって、

言うとおりに１０週してきた。

「次は腕立て伏せ１０回な。」

秋野さんは以東さんの命令に従った。

「次は腹筋１０回……」

秋野さんは気にしないでそれをこなした。

「……チッ」

以東さんは舌打ちをして、教室を去った。

## 呪いのファンファーレ

「……私何か悪いことしたかしら」

秋野さんは席について、本を読み始めた。  
以東さんのとりまきの、

風見さんと美輪さんが秋野さんに近づいた。

風見さんはフルネームで風見優理、

美輪さんはフルネームで美輪由子といった。

風見さんは秋野さんに向かって言った。

「真紀はね、あんたが全てこなすから出て行ったのよ」

続いて美輪さんが言った。

「真紀はあんたが全部失敗しているのを楽しみにしてたのよ。  
はあーあ、真紀出て行っちゃったじゃない。あんたが全てこなすか  
ら。」

秋野さんは、

「そう」

としか言わなかった。

何を言っても「そう」の一言のみだった。  
流石にこれには風見さんブチギレで、

「てめえいい加減にしろよ!!」

と秋野さんの髪をわしづかみにした。

秋野さんは引きずられていった。

それでも秋野さん、抵抗はしなかったんだ。

どこかで言ったように、以東さんの命令は絶対なのである。

だから秋野さんは全てをこなして、引きずられても抵抗しなかった。

………———どうやら、私が最初に思ったとおり、長期戦になりそうだ。

## 秋野の恨み

私はちょこちょこ付いていった。  
誰にかつて？勿論、風見さんと、  
引きずられている、秋野さんに。

気づいたらしく、風見さんは私を見た。

「……何か用？」

どこまで引きずるかが気になっていた。

「風見さん、それ、何処まで引きずるの？」

「勿論、真紀の所までよ。まさかとは思うけど、桜芽さん、手伝うの？」

私はあまり気が進まなかった。  
だから、勿論断っておいた。

「そう……真紀が言っただけ、アレ、ありがとうね。」

アレって……休校拒否か。

私が莫大の大金……といっても500万くらいだけど。  
それくらい出して、秋野さんを休校拒否した。

勿論、以東さんの命令で。

まあ、先程も言っただろうが。

「あ、うん、どういたしまして……」

「じゃ、私は真紀の所へ行ってくるから！」

風見さんは、秋野さんを引きずりながら廊下を走っていった。

風見さん、凄いスピードだ……

人間一人引きずっても、

あんなスピードが出るとは……最速の神だな。

帰って、友妓に話しておいた。

友妓は少し驚いた様子。

秋野さん、今頃どうしているだろう……。

優理と真紀が有紀子にしたこと（前書き）

友妓に話す前の話。

## 優理と真紀が有紀子にしたこと

「……で、秋野を連れて来た、と。  
……ところで、お礼は伝えてきたか？」

以東さんは風見さんに言った。

「ええ、秋野を連れて来たわ。  
それと、桜芽さんにはちゃんとそのこと伝えておいたわよ。  
ねえ？秋野有紀子さん。」

秋野さんは黙っている。

そりゃあまあ当然だろう。

私が秋野さんならああなる。

そして……

また見つかった……

「おう！雲雀じゃねえか！」

機嫌よく言えたもんだ。

「一人なんて珍しいな、友妓やあいはどうした？」

「教室にいる……と思う」

以東さんは更に言った。

「……なあ、雲雀。優理がいて由子いないってことは、  
奴は教室だろ？伝えてきておくれよ。優理でも良いや。」

流石だ……

まあ、実力者の娘なのだから当然か。

以東さんはお父さんが町の実力者で、

頼めば出来ることならいくらでもあった。

だが、あの時は家族がいたため、

家族には言わずに、私に頼み込んだのである。

一人暮らしの私に。

勿論これは本人に聞いた話。

ちゃんと私は質問したさ。

「あの、何であの時私に……」

「家族に迷惑かけたくなかったから

お前は一人暮らしだから、やってくれると思ったんだよ。」

此処で反抗するとんでもないことになる。

別に反抗する気も全くと言って良いほど無かったが。

何故この状況において、以東さんは平気でいられたのか……

## 壊れた文化祭

### 文化祭近日

秋野さんへのいじめは続いていた。  
収まるどころかむしろエスカレートしている。

「うちは喫茶店をやるぞ!!」

いきなり叫んだ以東さんに皆ビックリ。

「喫茶店……ね。」

友妓はまだ驚いている。

いきなり叫んだのにビックリしたそうだ。

そして、勿論以東さんが目にしたのは……

「デザインは秋野でいいか？やれるよな？  
確かお前美術部だったろ？明日までに考えて来いよ!!」

因みに私は料理人。

喫茶店だから焼きそばやパン位しか無いが、  
簡単な作り方なら知っている。

以東さんやあいはいはウエイトレス。  
友妓と風見さんは案内係だった。

……もしかして、料理人は私だけか？

と思ったが、なんと美輪さんも料理人だった。

私だけだったら死んでたぞ、確実に。

ただ、秋野さんはデザイン係。

デザインだけで終わってしまう。

流石にそれは学校に関わるかと思って、  
以東さんは案内係に認定した。

クレームが来るのは嫌だったそうだから。

## 壊れた文化祭（後書き）

### 豆知識

吃驚と書いてビックリと読むそうですね。

## 文化祭近日

「おい、秋野ー、デザイン考えてきたかー？」  
「私が見るわ」

以東さんの横には風見さんがいた。  
風見さんは早速秋野さんが考えたデザイン設定を見た。

次には、こう書かれていたらしい。

呪呪霊呪呪死  
死死死死死呪  
幽幽幽怨幽死

私を壊してください  
貴方は楽になるでしょう  
私を壊せば皆は喜び  
それが許せないから

1 9 8 2 7 5 8  
9 3 8 7 4 9 2  
0 1 9 7 4 8 3

「……何よこれ!!」

風見さんは以東さんには、  
設定用紙は見せないで報告だけした。

「真紀！これはデザイン設定じゃないわ!!」

「何だつて！？秋野！どういうことだ！！」

秋野さんは黙ったままじっと見ている。

「とにかく！！設定じゃないのなら却下だ！！」

風見さんは、秋野さんにデザイン設定用紙を返した。

その日の夜……

——風見さんに、異変が起こった。

## 風見優理の死

「……………」

その夜、風見さんはいきなり首を押さえたという。

「優理？優理！！」

風見さんのお母様は凄く悲しんでいたそう。

風見さんは首を押さえたまま死んだらしい。

やはりあの文章だろうか……

「……雲雀」

「……あい、もうこの世界に風見さんはいないんだ……」

やはり一番悲しんだのは以東さんだった。

以東さんのとりまきであった

風見さんがいきなり亡くなるのだから……

「……真紀、もう優理はいないけど、まだ私がいるじゃない。」

「……そうか、そうだよな、優理のためにバンバン働けよ、由子。」

美輪さんは一生懸命以東さんを慰めた。

因みに、友妓は家の都合で来れなくなっただけらしい。  
しかし、これは通夜。明日が葬式。

友妓は葬式になら行けるとのこと。

教室へ戻ると、以東さんは叫んだ。

「よく聞け！昨日の夜、優理が死んだ！！  
皆は優理の分も働けえい！！」

皆風見さんのために頑張った。

秋野さんは変えてきたという。

呪呪霊呪呪死  
死壊死死死呪  
幽呪幽怨幽死  
消消消殺消消  
殺殺呪殺死殺

皆は消える  
壊せば壊すほど壊れる  
皆は喜ぶ私も喜ぶ  
皆がいるから私は消える  
次の日には首が  
とれているでしょう  
私が壊れていない間は

1 9 幽 2 7 5 8  
9 3 8 7 怨 9 2  
0 1 9 呪 4 8 3  
9 3 8 2 7 8 1  
5 7 2 6 3 0 9

鎖 9 1 8 9 3 7

1 7 8 4 7 死 1

0 4 9 殺 3 9 2

「今度こそデザインだろうな……」

あまり見る気になれなかったらしい。  
そして帰りに偶然……

あいがああ文章を見た。

## 呪いのメール

「……ふふ……」

秋野さん

気味悪く笑っている。

鬼の首を取ったという感じで。

「……ふふ、怖いでしょう……」

以東さんと美輪さん、

友妓は気持ち悪いと言っばかりだった。

「あ……ああ……」

そこで始めて分かった。

あれが秋野さんの恨みだということが  
そして

それがあの人の怖さだということが。

「真紀……もうやめようよ……」

秋野さんは笑った。

口が三日月型になっている。

「……もっと怖いことしてあげる……」

家に帰った時のこと。

♪ピーロリーロリロピロリロリ

……携帯が鳴った。

♪ピーロリーロリロピロリロリ

メールの受信音だ。

♪ピーロリーロリロピロリロリ

開けなくちゃ……

携帯にはこう文字が書かれていた。

「差出人：秋野有紀子  
件名：呪いの文章」

## メール受信

因みに、あいが見た文章は、  
前のものだったらしい。

だから、変化はなかったと言う。

そして、

メールを受信した。

「……秋野さんから……？」

あいはメールを開いた。

その夜、あいは風見さんと同じように、

首をおさえていたという……

あいにく私はメールを即行削除した。  
だから見ていない。

「……消したね？」

この声はもしか——……

秋野さん

「消したね？なんで？」

秋野さんはもうあの時の  
秋野さんじゃなかった。  
変わってしまった……。

こついのを発狂寸前というのだろうか。

何故此処に秋野さんがいるのか

何故秋野さんは変わってしまったのか……

## 学校閉鎖

学校閉鎖

秋野さん

どうして変わったのか？

何故変わったのか？

何故此処にいるのか？

全てが謎まみれだ。

秋野さんは気味悪く笑っている。

秋野さんは話した。

「ふふふ、確かに消したら呪いはかからないけれど、  
こつちが困るじゃない。ねえ？ふふふふふ………。」

秋野さん……？

何を言ってるか全然理解できない！！  
分からない！意味が全く分からない！

携帯が鳴った。

♪ピリ□□□ピリー□

♪ピリ□□□ピリー□

♪ピリ□□□ピリー□

電話の着信音だ……

「え、はい、もしもし」

「雲雀か……？」

——以東さんからだった。

学校閉鎖？

「雲雀、実は……」

「……え？」

学校閉鎖だということを聞いた。

「そういうこと……」

秋野さんは笑っている。

「そういうことをされると困るって言っているのよ！-」

秋野さんは叫んだ……

というより、怒鳴った。

その声は以東さんにも聞こえたらしく、

「秋野がいたりするのか？」

と聞いてきた。

秋野さんはニヤニヤしている。

「言ったらブチ切れるから」

秋野さんそのものではない気がした。

秋野さんは私の携帯をぶんどって、

秋野さんの声で以東さんにいるということを見た。

その瞬間

以東さんは壊れた——気がした。

## 返して私の壊れた生命

いきなり電話を切られた。  
何かあったのだろうか……。

「狂ったねえ……実力者の娘が!!」

秋野さんは鬼の首をとったような顔をしている。  
何故そっという顔ができる。

そうか そうだよな

うらんでいたもんね

コレデワタシノカチダ

「秋野さん」

「何よ」

「どうやって此処に入ってきたの？  
その前に……何故此処に来たの？」

「目的は？私を殺すこと？違うの？そっでしょ？」

「いつの間にか狂っていた。」

「秋野さんは、なんとなくだが——」

「——悔しがっているようだった。」

## 逆転発狂人間？

「……何でそんなことをあんたが知らなきゃ……」

あの時はもう私じゃなかった気がする。

流石に私はブチ切れた。

「教えるつつつてんだよこの発狂人間が」

もう何を言いたいのかが分からなかった。

秋野さんはまだあの時は降参しなかった。

秋野さんは口を開いた。

「……どうやって来たかは教えてあげる。

あんたがいないときからずっといたってこと。」

鍵は閉めたはずなのにどうやって……

私の発狂モードはそこで切れた。

「……じゃあどうやって隠れていたかってことよね。

私は鍵なんかいらぬ存在なの。つまり人間じゃないってこと。  
あんたの家、隠れられそうなところがいくらでもあったもの。」

人間じゃない……？

じゃあ何者？

「教えるわけじゃないじゃない」

秋野さんは、何者だろう。

今の私と同じように、人間ではないのだろうか……  
今の私は魔法使いで幼い時までは人間だった。

そのときから魔法使いだったけど。

じゃあ何？

陰口の通り、幽霊だったとか？

## 秋野有紀子の正体

「まさか……幽霊……とか言わないよ、ねえ？」

秋野さんは首を横に振った。

「やあね、私が幽霊なわけじゃないじゃない。」

ここまでして、今更だが……

というか、前も言ったが、これは秋野さんじゃない。

「中にいるのは誰なの？」

秋野さんは口を開いた。

「途中までは秋野有紀子だったわ。今は違う。」

恐怖感に満ち溢れていた。

秋野さんじゃないってことは分かった。

途中までは、とは、消したと言ったところだろう。

多分、だが。

「じゃあ誰なの？」

秋野さんは黙ったまま、私の方を見ている。

何故だろう……

中にいるのは私の心か魂だと言いたいのか……？

## 秋野有紀子の正体（後書き）

作業BGM（というより動画）：呪われたサザエさん（ちょ  
w

## 一瞬行為

正体は……

あいだった。

私は秋野さんに対して、

一瞬行為をした。

一瞬行為っていうのは、

私が勝手に言っているんだけど、

一瞬を利用して殺すこと。

私が一瞬行為をするのはこれが始めて……

刺さっていた。

何が？

ナイフが。

「ふふふ……呪いつてね……？」

\*\*\*強力になるんだよ……？ふふふふふ……」

秋野さんだった。

普通、呪いといえば、

丑の刻参りなのだが、  
まだ子供である彼女には、  
これしか方法がなかったのだろう。

丑の刻参りというのは、  
巫女が戦闘に使った呪術の一つである。

彼女はそれが知っているから……

子供だからこそ出来なかった……

呪いは強力になり、  
既に皆は死んだ。

私は唯一の生き残りのようなもの……

以上である。

話しているのは、  
桜芽雲雀ではなく、

秋野有紀子でもあれば、  
沢木あいかもしれない……

そついうことを疑わなければならないもの……

……ふふふ……

## 一瞬行為（後書き）

完 結

短すぎたかと思います  
↑

\*\*\*に入る言葉、分かりますよね。  
あ、いや、死ぬとかじゃないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0300k/>

---

私ヲ壊シテ～呪いのメール

2010年10月10日04時57分発行